

『橋姫物語』の古体性

伊藤千世

『室町時代物語大成第十』に収録されている『橋姫物語』

(仮題)は、男女の哀しい恋物語である。この書の古本は、早くに散逸してしまい、一時期の間、歌論書の類によってその存在を知らせてきた。ここでは、散逸古本『橋姫物語』の原型が、いつ頃形成されたのか、また現存本との関連性はどうなのかを考察していきたいと思う。

さて、『国書総目録』⁽²⁾によると、『橋姫物語』には、東京国立博物館本と国会図書館本の二本が存在する。この東京国立博物館本には、外題・内題・奥書がない。それに対して、国会図書館本には、外題に「伊多矢貝」とあり、奥に「伊多屋かい之物語／如慶広通筆写／ぬしやはた定実／

再主山名貫業」とある。本文等が、東京国立博物館本とはほとんど変わらないので、都合上、本文は『室町時代物語大成第十』に収録されている東京国立博物館本で見ていることにする。また題名もこの仮題によることにする。

なお、この物語に関しては、桑原博史氏・保里十三子氏・吉海直人氏・三角洋一氏等による研究論文がある。

二

『橋姫物語』の存在を伝える資料の中で、最古の作品は『奥義抄』⁽⁷⁾であり、『古今和歌集』⁽⁸⁾巻第十四恋歌四・六八九番の「題しらず」「読人しらず」として収載されている歌注釈の部分に、

六十一 さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつ

らむ宇治のはし姫

此歌橋姫の物語と云ふものにより。昔めふたりもたりけるをとこ、もとのめのさはりして七いろのめをねがひける。求めにうみべにゆきて龍王にとられてうせにけるを、もとのめ尋ねありきけるほどに、はまべなる庵にやどりたりけるよ、おのづから此をとこにあひにけり。此歌をうたひて海邊よりきたれりけるなり。さてことのあるやういひて、あくればうせぬ。このめなくくかへりにけり。今のめのこの事をき、て、はじめのごとくゆきて此男をまつに、又この歌をうたひてきければ、われをば思ひすて、もとのめをこふるにこそとねたく思ひて、をとこにとりか、りたりければ、をとこもいへも雪などのきゆるごとくにうせにけり。

よのふる物がたりなればくはしくか、ず。

と記されている。また、「顕注密勘抄」の同じ歌の藤原定家加注部分には、この物語の存在について、

先人幼稚之時、橋姫といひし物語をめのとのよみてきかせしかば、あはれとおぼえて落涙、成人の後見ばやと思に、其物語不尋得。其に此歌はありし也と被申き。

と記されている。この先人とは、定家の父俊成である。【奥義抄】の成立と清輔・俊成の年齢の關係は、『日本歌学大系』

第一卷の「奥義抄」の解題によれば、

保延元年（天皇十七、俊成二十二、清輔三十二）乃至天養元年（天皇二十六、俊成三十一、清輔四十二）の間に成つたことは誤なからう。

となる。要するに、定家の注によると、俊成は、清輔が「奥義抄」に記したよりも先にこの物語を見ていることになる。そして、俊成が成人後に見つけることができなかつた「橋姫物語」を、清輔は後に「奥義抄」に記していると考えられる。故に、十二世紀中頃まで、散逸古本「橋姫物語」は、存在していたと思われる。

また、これらの歌論書から、散逸古本「橋姫物語」には、「さむしろに」の歌が含まれていたことがわかる。同じく現存本にも、物語中に、同様の歌が詠まれている。ところが、物語歌撰である「風葉和歌集」には「橋姫物語」の名や歌は見られない。「風葉和歌集」の序では、勅撰和歌集に選入されている物語の歌について、

さてもうつほの「なすこそ神」といへる歌は「拾遺集」に入り、住吉の「これを入相」の連歌は、小一条院の御歌とかきこゆ。かかる類多かれど、いづれも物語や先ならむとて、漏るべきならねば、今これを除かぬるべし。

と記している。つまり、物語が勅撰和歌集より先に成立し

ている場合は、『風葉和歌集』に、歌を選入するということを主張しているのであろう。「さむしろに」の歌が『風葉和歌集』に収載されていないのは、勅撰和歌集の成立よりも物語化は後と解しての処理と考えられなくもないが、むしろ、すでにこの物語が『風葉和歌集』当時散逸してしまっていたので、選入できなかったのでなからうか。

三

さて、『古今和歌集』巻第十四恋歌四・六八九番の「宇治の橋姫」という名称にはどんな意味があるのだろうか。この歌は、男性がいとしい女性を思い、しかも通って行けないことを嘆く気持ちを詠んでいる。ここで、『古今和歌集』の恋の部の中で、思う相手をどのように表現しているのかを見てみると、「君」「人」という二人称三人称で表現している。ただ、思う相手ではないが、比喩的に、

巻第十二 恋歌二 六一二

題しらず

みつね

我のみぞかなしかりける彦星も逢はですぐせる年しな
ければ

のみ、「彦星」という伝説上の主人公名を使用しているにすぎない。故に「宇治の橋姫」の名を詠み込む六八九番の

場合は、非常にまれなケースである。

今度は、恋の部以外で、探してみると、

巻第四 秋歌上 一七五

題しらず

読しらず

天の川紅葉を橋にわたせばや七夕つめの秋をしも待つ

巻第四 秋歌上 一七九・一八〇

七日の日の夜よめる

凡河内躬恒

年ごとにあふとはすれど織女の寝る夜の数ぞすくなく
りける

たなばたにかしつる糸のうちはへて年の緒ながく恋ひ
やわたらむ

がある。この場合も、六一二番と同様、七夕伝説の主人公達を詠んでいる。

次に、『古今和歌集』の中には、「姫」という言葉が付く
名称を持つ歌として、

巻第五 秋歌下 二九八

秋の歌

兼覧王

龍田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散

るらめ

巻第十七 雑歌上 九二六

龍門にまうでて滝のもとにてよめる 伊勢

裁ち縫はぬ衣着し人もなきものをなに山姫の布さらす

らむ

の二首がある。このうち「龍田姫」は、紅葉の美しい龍田山が奈良の都の西に当たることから、そこに女神が住むという伝説が生まれ、想像された秋を司る女神である。故に、二九八番の歌は、「龍田姫」伝承をもとに詠まれた歌である。これに対して「山姫」は、歌意からいって、女神としてとらえることができる。つまり、九二六番の歌は、昔三人の仙人が龍門寺で修行し、その後空を飛行し去ったという伝説をもとに、伊勢が、自分の気持ちを詠んでいる。この二例から、「宇治の橋姫」は、「女神」ではないかとも考えられる。しかし、この六八九番の歌の作者は、「説人しらず」であり、作者に関する左注も無く、恋の部に選入されているので、男神が女神を思い詠んだ歌とは断定しきれない。それよりも、純粹な恋愛歌と見ておく方が妥当のように思われる。

続いて、用例の幅を少し広げ、「萬葉集」で「姫」という言葉が付く名称を詠み込んでいる歌を調べてみる。すると、「息長足日女命」の場合の三首と、「松浦佐用姫」の場合の九首のみである。「息長足日女命」を詠み込んだ歌は、「古事記」¹⁰³「日本書記」¹⁰⁴にもみられる新羅討伐の伝説を詠んでいる。「松浦佐用姫」を詠み込んだ歌は、逸文「肥前風土記」にみられる「松浦佐用姫」と「大伴佐提比古」と

の別離の伝説を詠んでいる。

以上の結果から、歌の中で「・・・姫」と使用される場合は、女神という認識もあるかもしれないが、その名の背景に物語性を持つていると指摘できる。要するに歌は、最終的に贈答を意識するものであるから、必ず贈答の相手同志は、相手を理解しあっているはずである。だから、詞書き等には贈答の相手の名を詠み込むことはあっても、歌の中には、詠み込む必要はない。それよりも、限られた文字数の中で、自分の感情を上手に表現し伝えたいという意識のほうが強いはずである。故に、「宇治の橋姫」という言葉が詠まれた時点で、その名には伝説（物語）が、付加されていたと考えられる。この点から、「古今和歌集」の六八九番の歌が詠まれた頃には、「奥義抄」で示すところの古型「橋姫物語」の伝説（物語）はすでに存在していたと推定してよいのではないだろうか。

四

次に、「古今和歌集」の六八九番の歌の異同を調べてみると、本文はすべて同一本文であるが、左注には、

1 またはうぢのたまひめ

2 またはうぢのはまひめ

3 左注なし

の三バターの異同がみいだされる。いわば、「うぢのはしひめ」をどう記しているかという問題である。ここで、まず左注の「うぢのたまひめ」と「うぢのはまひめ」では、どのような意味の違いがでてくるかを考えてみる。「うぢのたまひめ」の場合は、「うぢ」は京都の宇治地方を意味し、「たま」という言葉に「美しい」という意味があることから、宇治地方に住む美しい女という意味になる。これに対して、「うぢのはまひめ」の場合は、宇治地方の浜辺に住む女という意味になる。ところで、「はま」について「枕草子」をみると、

浜は、そと浜。吹上の浜。長浜。うちでの浜。もみよせの浜。千里の浜、ひろう思ひやらるれ。

といった諸例があげられている。「古事記」中巻・景行天皇の部分で、倭建命の魂が白鳥となって飛び立って行く折の歌謡には、

浜つ千鳥 浜よ行かず 磯伝ふ

と記されている。このような諸例から、浜は、川ではなく、海や湖などの水際の砂地部分を意味する言葉といえる。ところが、宇治地方には宇治川はあっても海や湖は無い。故に、「うぢのはまひめ」と「うぢのたまひめ」の異同は、「た」(「太」を字母とする)と「は」(「者」を字母とする)の

仮名が似ていることにもとづく、「古今和歌集」書写上での書き損じで、このような異同が生じたのではないかと推察される。

また、俊成は、「古今問答」で、

宇治橋姫と申物語候、其ノ御覧すべし。但其物語、神代等ノ昔事なるか、將又此哥ニ付テ其物語ヲ作れる歟、此哥讀人不知ト云、此事不分明、或説云、宇治離宮ト申神ハ橋姫也と云々。待誰人哉、待太子也。

と記していることから、古型「橋姫物語」には、「橋姫物語」「玉姫物語」という複数の呼び名が存在していたと思われる。これは、加茂真淵が、「古今和歌集打聽」に「宇治の橋姫」の名について、

思ふに萬葉にはしき妻はしき妹など多くよめり、はしきとはくはしきと云事にてくはしきはいにしへよき事をのみいへり、即うつくしむ意也、さらばはし姫ははし妻と云

と記しているように、もともと「橋姫」には、美しい姫とという意味があったため、同様の形容を示す「橋姫」「玉姫」という複数の名が存在することになったと思われる。そして後には、宇治という地名のもつ特異性や宇治橋の存在が「袖中抄」等に見られる土着の民間説話等とあわさって、「宇治の橋姫」という名に定着したのではないだろうか。

五

ところで、『顕注密勘抄』には、『古今和歌集』の六八九番の注に、

又六帖、家持歌云、

むばたまのよむべはかへるこよひさへ我をかへすなう
ぢのたまひめ

という歌が引用されている。そこで、宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本『古今和歌六帖』²⁰第五雑思・三〇二三番の歌をみると、

くれどあはず

という詞書きをもつた歌の第六番目に、

むばたまのよむべはかへるこよひさはわれをかへすな
うぢのたま姫

として収載されている。しかし『古今和歌六帖標注』で、この三〇二三番の歌を確かめてみると、大伴家持の歌として収載されており、第五句目は「みちのながてを」になっている。

次に、『萬葉集』を調べてみると、

大伴宿禰家持、更に紀女郎に贈る歌五首

といった詞書きを持つ五首目の歌として、巻四の七八一番

に、

ぬばたまの昨夜は返しつ今夜さへ我を帰すな道の長手
を

という形で、大伴家持と紀女郎との贈答歌として収載している。この場合、自分を帰さないで欲しい相手は紀女郎であり、桂宮本『古今和歌六帖』の三〇二三番の「うぢのたまひめ」にあたる存在が彼女になる。また、『校本萬葉集』で調べてみても、第五句目が「うぢのたまひめ」になっているものはなく、大伴家持・紀女郎が宇治地方に関係していたかどうかについては、不明である。それ故に、この歌の脚色には、意図的なものが感じられ、かつ古型『橋姫物語』と関係が深いように思われる。

なお、『古今和歌六帖』には、『古今和歌集』の六八九番の歌が、

いへとじをおもふ

という詞書きをもつ第六首目に、

さむしろにころもかたしきこよひもやわれをまつらん
宇治の橋姫

として、二九九〇番に収載されている。この場合、左注はなく、第五句目は勅撰集である『古今和歌集』の本文に従っている。

そこで、『古今和歌六帖』で、題の異なりによって離れ

て選人されているこの二首を合わせて考えてみたい。詠まれた時の状況設定を想定してみると、

三〇三番「むばたまの」	男女の契りを結ぶ前に詠まれた男の歌
二九〇番「さむしろに」	別に新しい女性ができて男の訪れが少なくなつた時に、本妻（「いとじ」）をあわれんで詠まれた男の歌

と推察できる。そして、異なる題で離れているこの二首を合わせ、物語を推定してみると、

逢わぬ恋↓恋の成就↓新妻の出現による本妻への哀憐といった一連の男女の恋愛物語の構想が浮かび上がる。即ち、『奥義抄』に記された『橋姫物語』とは一部異なり（本妻と結ばれるまでのいきさつ）、一部相似する（本妻・新妻の存在）恋愛形態の物語の存在を意味する。この形態は、『古今和歌集』六八九番の詠まれた頃の『橋姫物語』の伝承に近似しているのではないだろうか。

六

『奥義抄』の『橋姫物語』（a）の内容を主人公の男の

行動と時間の流れをみながら、現存本『橋姫物語』（b）と対応させてみると、次のようになる。

- ① a 二人の妻を持つ男がいる。
b 謹慎中の中將で難波辺りに住んでいる。
- ② a 男は、つわりの本妻のために七色の若布を探しに行く。
b 遥か海上にでる。
- ③ a 男は、龍王にさらわれる。
b 日暮れに笛をとって、青海波を吹いていると正氣の心もなくなり、夢幻の境地になる。
- ④ a 本妻は、行方不明の男を尋ね歩き、浜辺の庵に宿る。
b 本妻は、形見の子を養って待つこと三年、男の消息無し。或る日の暮れ方あばら屋にたどりつき、姥に一夜の宿を求める。
- ⑤ a 歌（「さむしろに・・」）を歌いながら、海からやって来る男と再会する。
b 姥から、龍王の婿になった男が今夜この場所に来ることを聞く。姥のはからいにより、（途中姥が外出するが、鍋の中を見ないことを約束する）再会する。男は、随従の妖物に擁護されて訪れる。しばらくしてこの物達はなくなる。
- ⑥ a 本妻、男と別れ家に帰る。

b 姥に帰途の道を教えられて帰る。

⑦ a 本妻から事情を聞いた後妻も、男を尋ねて行く。

b 姥に出会い、本妻同様の約束をするが鍋の蓋を開けてしまう。

⑧ a 男は、前回と同様の歌を歌ってやって来た。後妻は嫉妬心を起こし、男に飛びかかる。

b 後妻は、不意に飛び出す。

⑨ a 男も家も消えてしまった。

b 范々たる島の松原と板屋貝一つあるだけであった。

板屋貝は、龍王の持ち物であった。

⑩ b 帰宅した後妻に事情を聞いた本妻は、その所に行きたけれども、跡形もなく、男と再会することもできなくなり、嘆く。

⑪ b 後妻の嘆き。

この内容分析からすると、現存本は、『奥義抄』の『橋姫物語』と比べ、人物・時間の流れを、より具体化して描かれており、特に③ b以降に特徴性がみられる。③ bでは、話の展開に重要な役割を担っている姥の出現が非常に興味深い。この姥は、物語の流れを潤滑にさせるための登場と考えられる。例えば、設定状況から、男が龍王にさらわれた事実は想像されるのだが、明確に彼女の言葉でその点が示されている。また、姥の取り計らいにより、妻達は、男

と再会できる。この時、姥は、鍋の火の番を頼み、鍋の蓋を開けないことを約束させている。火を熄んでいるのである。ところが、後妻は本妻のように約束が守れず、鍋の蓋を開けてしまう。しかし、この火を熄む行為の意図が、はっきりしない。禁忌がさせられているにもかかわらず、約束を守った本妻も、守らなかった後妻も男に会う機会は、得られているからである。ところで、『古事記』において、『伊耶那美命』は黄泉の国で食事をしたから、地上に戻れなかったが、この男は海で食事をしていないので、地上に現れることができたのではないかと思われる。故に、鍋の中のものを捨ててしまうならしかたがないが、鍋の蓋を開けただけなら、大きな禁忌を犯したとはいえないとも考えられる。⑩の過程では、後妻の再会がうまくいかなかった理由をあげている。『奥義抄』の『橋姫物語』の場合は、⑩ aで示すように、男につかみかかったために、すべてが消えてしまっている。これに対して現存本は、⑩ bで示すように、男が本妻ばかりを思っていたため、男の周囲を擁護している妖物がいる間に、嫉妬心かられて、男の前に思わずでてしまったことが、再会を失敗に導いている。そして、後妻は、

これは夢かや、うつ、かや、われをわれと思へは、う
ちの橋姫の、ことをのみ、くちすさひにもしつるうら

めしさよ、いかにしたれば、みつるそ、かなしや、あ
しすりしていふ、しくく

と、鍋の蓋の中を見てしまった事を嘆くのではなく、男の
本心を知ってしまった事を嘆いているのである。そして、
最後に、彼女は、

わらはか、とかはかりにても、やはす、とにかくにあ
さまし、うらめしや、返さも、あな、た、あのわか
君のゆへよ、あらにくやく

と嘆いている。この後の歌に、

たれゆへに、そののみくつと、なりにけむ、猶もこふ
らし、宇治のはし姫

と、後妻の恨みの歌とも、男の「宇治の橋姫」を思う気持
ちとも解される歌が記されている。

なお、現存本は、すべてが消えてしまった中で、「いた
や貝」だけが残されている。これは龍王の所有するもので
あり、幻想の世界から現実の世界へ戻った唯一の証拠の物
である。ところで、「いたや貝」の名の由来は、板葺きの
屋根の棧に似ていることによる。すると、家が無くなりも
との板屋を想像させる貝が残っていたというところに、現
存本の作者の才がみられる。

以上の比較からすると、現存本は、「奥義抄」と似てい
る点もあるが、似ていない点もあると指摘できる。しかし、

①『古今和歌集』以後の歌は、「橋姫」を、待つ女のイ
メージのみに主眼をおいて詠んでいる。

②『奥義抄』は、歌論書である。

③清輔は、『和歌初學抄』の喩來物で、
人をまつ事には、ウヂノハシヒメ

さむしろにころもかたしきこよひもやわれをまつらむ
うぢのはしひめ

と記している。

という点からすれば、清輔は『橋姫物語』の梗概のすべて
を書き著したのではなく、ただ粗筋のみを書き留めている
にすぎないとも考えられる。いいかえれば、『奥義抄』に
記された『橋姫物語』は、「さむしろに」の歌に関連のあ
る説話として引用されているにすぎない。それ故、現存本
と『奥義抄』との物語の細部に至るまでの一致、不一致は
問うことができず不明なのである。

七

現存本『橋姫物語』の話型は、男が龍王に婿入りした型
で、

男女の幸せな生活↓男が龍王に誘拐される↓先妻と男
の再会↓後妻は自らの愚かな行為のため、男との再会

が失敗する→男は人間世界に戻れなくなる

という筋になっている。ところで、横笛の音は、鳴きながら海に入った龍の声を模したものだという伝承が、『龍鳴抄』²³「教訓抄」²⁴に記されている。故に、「青海波」の曲を笛で吹く中將は、龍王にさらわれる要素を強くもつていたことになる。つまり、この場合の貴種は、中將である。この要素をもたない橋姫は、凡人として行動していることになる。

ここで、貴種と凡人の恋愛譚を主軸にした他の中世小説を見てみると、『をぐり』²⁵の照手姫の場合は、

この者を一引き引いたは千僧供養、二引き引いたは万僧供養

という上人の書き添えを見て、夫（小栗は鞍馬寺の申し子）の供養にと五日の暇をもらい、夫の変わり果てた姿とも知らず大津関まで引いたことが、小栗判官の再生に一役買っている。また、『天稚彦草子』²⁶の場合は、末の妹が、姉達のさしがねのため、約束したはずの蓋を開けてしまったことにより、海龍王天稚彦との結婚生活に破綻をきたす。しかし、彼女の行動力と天稚彦の助力により、年に一度再会することができるようになる。要するに中世小説において、この類の話型は、ハッピーエンド型で終わる傾向にある。

また、『毘沙門堂蔵古今集注』²⁷では、

思ニハ忍フル事ソマケニケル色ニハイテシト思ヒシ物ヲ

の歌の注釈部分に、

山城國風土記云宇治ノ橋姫七尋ノ和布ヲツハリニ願ケル程ニオトコ海邊ニ尋行テ笛ヲ吹ケルニ龍神メテ、聲ニトレリ姫夫ヲ尋テ海ノハタニ行ケルニ老女ノ家アルニ行テ問程ニサル人ハ龍神ノ聲ニ成テオハスルカ龍宮ノ火ヲイミテ此ニテ物ヲ食スルナリソノ時ニミヨト云ケレハカクレ居テ見之ニ龍王ノ玉ノ興ニカ、レテ來テ供御ヲ食シケリサテ女物語シテナク／＼別レケリ遂ニハカヘリテ彼女ニツレタリト云リ

といった『興義抄』とは異なるハッピーエンド型『橋姫物語』が記されている。この中で引用されている『山城風土記』は、古風土記でなく、平安時代末期か鎌倉時代初期に編纂されたものか、或いはこの注釈者が偽って記した書名であろう。この問題は別として『橋姫物語』は、『毘沙門堂蔵古今集注』のように、ハッピーエンド型に改作されても良かったはずである。しかしそうならず、現存本『橋姫物語』は、すべての事柄が解決されず、悲劇型で終結している。これは、「さむしろに」の歌の持つ強烈なイメーシ性と、この歌へのこだわりもあるが、現存本『橋姫物語』が早い段階に改作されたままであるということを示し

ているのであろう。しかも設定状況が単純である点やつじつまの合わせ方の矛盾性から、現存本「橋姫物語」は散逸古本「橋姫物語」の面影を残しており古体性を強くともめていると考えられる。

なお「古今集注」で、「宇治の橋姫」について、鎌倉時代まで「興義抄」に記されているものを多く伝えているのは、和歌世界の伝統性を尊ぶ気風によるものであろう。

八

「橋姫物語」は、従来「伊勢物語」や「源氏物語」の宇治十帖にその関連性がみられてきた。まず、「伊勢物語」との相似性を見ていくことにする。「伊勢物語」六十三段「つくも髪」は、「古今和歌集」六八九番の歌をもじり、

さむしろに衣かたしき今宵もや恋しき人にあはでのみ寝む

といった歌を、老齡の女性に詠ませている。

この段の内容は、

①三人の子供を持つ女がいる。

②この女、男を慕う気持ちが付く。

③三男の媒介により在五中将と情愛を結ぶ。

④やがて男（在五中将）は訪れなくなる。

⑤女が男の家をのぞき見すると、男が女の家を訪れるそぶりであったので、女は急いで家に戻る。

⑥女、男がのぞき見をしているのを知りながら歌を詠む。

⑦この歌により、男は、その夜、女の家泊まった。

といったもので、「宇治の橋姫」の持つ「待つ女」のイメージを逆手にとったパロディー物で、笑話化して、歌徳説話になっている。また、六十五段は、帝によって流罪にされた男が、毎夜毎夜、恋しい女のもとに笛を吹きに来る話である。この流罪になった男という点と笛を吹くモチーフが同じである。笛について、折口信夫氏は、うつぼなる物が神靈の器であることを示し、

笛の中に靈魂を密封しておく、といふ信仰があつたものと考へてよいと思ひます。

と述べられている。また、「伊勢物語」の六十五段には、思ふにはしのぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ

といった歌が詠まれている。この歌は、「古今和歌集」巻第十一恋歌一・五〇三番の歌の下の句を変えたものである。「昆沙門堂藏古今集注」は、五〇三番の歌の注釈に、現存本「橋姫物語」に似た話が記されていることは前に述べたとおりである。この歌注釈も六十三段・六十五段の一連の物語のモチーフの相似性から、この物語を書き記した

のではないかと考えられる。なお、六十三段・六十五段は、『伊勢物語』の第三次の過程で加えられた段である。

『源氏物語』においては、宇治十帖が、宇治という土地を舞台にしたり、「橋姫」の巻の存在や宇治の姫君達が主人公になっている点によっていることが大きい。三角洋一氏はこれらの点を指摘して、

ここで『橋姫物語』の成立は『源氏物語』以前にさかのぼるのではないか、という一つの心証をえたように思う。

と述べられている。事実この宇治十帖がもつ、しみじみとした情緒の雰囲気までも、『橋姫物語』と非常に似通っている。

けれども、話の内容がもつ幾つかのモチーフからいくと、「須磨」「明石」の巻の源氏流離譚にも、似通っているように思われる。ここで、『奥義抄』の「橋姫物語」と、現存本「橋姫物語」を「源氏物語」の「須磨」「明石」の巻と比較してみることにする。まず、登場人物に関しては、次のように一致する。

龍王	龍王	龍王
今之妻	かたつかたの人	明石の上
本妻	宇治の橋姫	紫の上
妻二人持ちちりける男	中将なりける人	源氏
【奥義抄】	現存本	【源氏物語】

そして、この主人公の行動や特徴を比較すると、先程の『橋姫物語』の内容を分析した①から③の過程が似ている。①の過程においては、

現存本	【源氏物語】
1妻が複数	1妻が複数
2謹慎中	2謹慎中
3海辺に住む	3海辺に住む
難波辺り	須磨

以上のように対応しており、『奥義抄』↓現存本↓『源氏物語』へいく程、登場人物が具体化して表現されている。更に、『橋姫物語』の②・③の過程を見ると、中将が、若布を採りに海上へ出掛けていってさらわれている。これ

に対応している部分として『源氏物語』では、以下の話の点があげられる。「須磨」の巻で、源氏は、

弥生の朔日に出て来たる巳の日、「今日なむ、かく思すことある人は、禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。

と、上巳の祓えをすすめられて、海に出ることになる。ただ、この時の源氏自身は、祓えを意識しているより、逍遙気分の方が強い。そして、祓いの儀式をしている時に、大風・高潮・雷という天変地異が起こる。その夜、源氏は、

君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、たどり歩くと見るに、おどろきて、さは海の中の龍王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。

といった夢見をしている。つまり、源氏が龍王にさらわれかかったと解釈できる。この後、源氏は、神々や亡き父の加護により、明石の地に移ったことで、大事に至らずに済んでいる。また、『橋姫物語』の場合は、笛の音が龍王の気持ちをもそったようである。源氏の場合は、須磨の生活の憂いを琴で慰めている記述が多い。この琴の音が、龍王の気持ちを動かす一因になったようにも思われる。要する

に、龍王にさらわれるという話のモチーフが、結果は異なるが似ているのである。以上のように『橋姫物語』と『源氏物語』は、共通項が多い。

故に、『橋姫物語』は、『源氏物語』や現存本『伊勢物語』と物語の状況設定や伏線の似ている点が多く、相互間の影響が推測される。

九

以上の考察の結果を要約してみると、

1 『橋姫物語』は、『古今和歌集』に収載される六八九番の歌が詠まれた頃には、この歌の中に「宇治の橋姫」という名が詠み込まれている点から、すでに物語の外郭ができていたのではないか。

2 『古今和歌集』の六八九番の左注や俊成の『古今問答』から、物語の作成された当初には、複数の題名があったのではないかと考えられる。また、『古今和歌六帖』の題や和歌から、現存本『橋姫物語』ではうかがえない本妻との恋愛譚があったのではないか。

3 『奥義抄』の『橋姫物語』と現存本『橋姫物語』とを比較すると、おおまかな筋においては相似しているが、幾つかのつじつまあわせや物語の具体化など改作者の

才が見られなくもなさそうである。また、物語の話型の特質から、早い段階においての改作ではないかと思われる。

4 「古今和歌六帖」段階までの橋姫伝承と、「奥義抄」段階での橋姫伝承（「よのある物がたり」と記されている）は「伊勢物語」や「源氏物語」等にも影響を与えているのではないだろうか。

という点が指摘できそうである。故に、散逸古本「橋姫物語」は、「源氏物語」の「須磨」「明石」の巻の成立以前に創作されたのではないかと考えたい。そして、現存本「橋姫物語」は、その古本のもつ特質を相当程度まで保有している作品と考えられるのである。

注

- (1) 『室町時代物語大成第十』（角川書店 一九八二）に収められた東京国立博物館蔵「橋姫物語」（仮題）による。
- (2) 『国書総目録第六卷』（岩波書店 一九八二）による。
- (3) 桑原博史「宇治の橋姫伝説と橋姫物語」「中世物語の基礎的研究」（風間書房 一九六九）
- (4) 保里十三子「橋姫物語考」（『東洋大学短期大学論集・日本文学篇』第5号 一九七〇）
- (5) 吉海直人「橋姫物語の史的考察―源氏物語背景論Ⅰ」（『国

学院大学大学院文学研究科紀要』13 一九八二）・「橋姫物語」（校異・捨遺・覚書）『国書逸文研究』9 一九八二）

(6) 三角洋一「『橋姫物語』の位相」（『日本文学』33・4 一九八四）

(7) 『日本歌学大系第一卷』（風間書房 一九八三）に収められた「奥義抄」による。

(8) 『日本古典文学全集7古今和歌集』（小学館 一九八〇）による。

(9) 『日本歌学大系別第五』（風間書房 一九八七）に収められた「頭注密勘抄」による。

(10) 『日本歌学大系第一卷』（風間書房 一九八三）の解題による。

(11) 樋口芳麻呂『王朝物語秀歌選上』（岩波書店 一九八七）『王朝物語秀歌選下』（岩波書店 一九八九）に収められた「風葉和歌集」による。

(12) 『日本古典文学全集2―5萬葉集1―4』（小学館 一九八〇）による。

(13) 『日本古典文学全集1古事記上代歌謡』（小学館 一九八〇）を参照。

(14) 『日本古典文学大系67日本書紀上』（岩波書店 一九六七）を参照。

(15) うちのたまひめとあるもの

大江切・久海切・基俊本・六条家本・永治本・永曆本・
寂惠本・伊達本・中山切

うぢのはまひめとあるもの

本阿弥切・関戸本・前田本・天理本

左注の無いもの

志香須賀本・元永本・雅俗山庄本・寛親本・後鳥羽院本

・雅経本・建久本

(16) 『日本古典文学全集11枕草子』(小学館 一九八〇)による。

(17) 『国語国文学研究史大成7古今集新古今集』(三省堂 一

九六〇)に収載された『古今問答』による。

(18) 『加茂真淵全集第9巻』(統群書類従完成会 一九七八)

に収載された『古今和歌集打聽』による。

(19) 『袖中抄の校本と研究』(笠間書院 一九八五)の『袖中抄』

の本文によると、『橋姫物語』の粗筋の他に、「宇治の橋姫」

を橋を守る女神とみなし、

1 宇治の橋姫と離宮の交流伝承(民間説話)

2 宇治の橋姫と住吉明神との交流伝承(隆縁説)

をあげている。

(20) 『新編国歌大観第2巻』(角川書店 一九八四)に収載さ

れた『古今和歌六帖』による。

(21) 『校本萬葉集三』(岩波書店 一九七九)による。

(22) 『日本歌学大系第二巻』(風間書房 一九八三)に収載さ

れた『和歌初學抄』による。

(23) 『群書類従十九輯』(續群書類従完成会 一九五九)に収

載された『瀧鳴抄』四十七頁を参照。

(24) 『日本思想大系23古代中世芸術論』(岩波書店 一九七三)

に収載された『教訓抄』百五十五頁を参照。

(25) 『新潮日本古典集成説経集』(新潮社 一九七七)に収載

された『をぐり』による。

(26) 『新潮日本古典集成御伽草子集』(新潮社 一九九二)に

収載された『天稚彦草子』による。

(27) 『未刊国文註釈大系第四巻』(清文堂 一九六九)に収載

された『昆沙門堂本古今集注』による。

(28) 『日本古典文学全集12-17源氏物語一-一六』(小学館 一

九八〇)による。

(29) 『日本古典文学全集8竹取物語伊勢物語大和物語平中物語』

(小学館 一九八〇)に収載された『伊勢物語』による。

(30) 『折口信夫全集第十五巻』(中央公論社 一九六七)に収

載された『石に出て入るもの』を参照。

(31) 『日本文学研究資料叢書平安朝物語1』(有精堂 一九七〇)

に収載された片桐洋一『伊勢物語の成長に関する覚え書き』

図書寮本異本業平集をめぐって』を参照。

(32) 注(6)に同じ。

(大学院博士後期課程二年)